

# 成人期における多重役割と心理的健康度について

## — 家庭役割の捉え方における父母比較 —

○福丸由佳

無藤隆

(お茶の水女子大学人間文化研究科、日本学術振興会) (お茶の水女子大学生生活科学部)

### 【目的】

多重役割と心理的健康度については、欧米を中心とした研究が多く見られるが (Duzberry & Higgins, 1991; Barnett & Marshall, 1991 など)、わが国でも共働き世帯の増加や少子化、景気の低迷などの昨今の社会経済状況や、性役割分業の規範意識といった日本独自の文化的状況などを踏まえた研究が今後益々必要になってくるだろう。また従来この分野では母親が働くことによる心理的側面に焦点が当てられることが多かった。しかし役割の比重は異なるにせよ父親も多重役割を担っており、専業主婦世帯の父親も含め、今後は夫婦という関係性の中で捉えることが重要であろう。福丸(1999: 発心10回大会)は予備的調査結果から父母共に、家庭役割を仕事役割に対しての肯定的な存在として捉える傾向があり、かつそれが心理的健康度に関連することを示した。従来の研究は仕事から家庭へのコンフリクトに焦点をあてた研究が多いが、家庭役割の捉え方も重要であると言える。そこで自己及びパートナーへの評価という視点から家庭役割に対する捉え方を検討し、実際の行動との関連について検討する。

### 【方法】

平成10年6月、東京都S区と神奈川県Y市の保育園児の父母63組を対象に質問紙調査を行った。母親はいずれも有職(含、パート勤務)であった。主な調査項目は以下の通りである。

- ・ 仕事役割と家庭役割に対する心理的重要度：Lauler.Eの項目を主に使用
- ・ 仕事役割、家庭役割の従事に対する評価：「私は家事や育児をよくやっている」という自己評価と「夫(妻)は家事や育児をよくやっている」という他者評価からなる。
- ・ 仕事役割から家庭役割への葛藤、家庭役割から仕事役割への葛藤
- ・ 育児参加：子どもとの関わりの量について
- ・ 夫婦関係：菅原(1997)の愛情尺度を使用
- ・ 心理的健康度：自己評価抑うつ尺度(SDS Zung, 1965)
- ・ その他、労働時間、学歴などの属性と、職場環境、などについても質問した。

### 【結果と考察】

まず家庭役割に対する評価については、父親母親共に、自身の自己評価よりも配偶者からの評価の方が有意に高かった(父親： $t=-3.77$   $p<.001$ ，母親： $t=4.52$   $p<.001$ )。これは、有職の母親は家庭役割における負担が多いにも関わらず、家庭役割の従事については夫の評価より自己評価が厳しいことを指摘するWortman et al.(1991)の結果と一致する。また評価における夫婦間の相関は見られず、配偶者への評価は夫婦関係と関連していなかった。

また家庭役割に対する自己評価と心理的健康度との関連については父親では有意な関係が見られないのに対して、母親では抑うつ尺度と有意な負の関連が見られた( $r=-.280$   $p<.01$ )。すなわち乳幼児を持つ有職の母親は、家庭役割に対して夫からの評価に比べ「自分はよくやっている」という肯定的感情をあまり持つことができず、またそのことが心理的な健康度の低さに関係していることが示唆された。

さらに実際の育児参加の量との関連について検討したところ、父親の育児参加は自己評価および母親からの評価と強く相関を示したのに対し(それぞれ  $r=.547$   $p<.001$  ;  $r=.483$   $p<.001$ )、母親では実際の育児参加との関連は見られず、むしろ「自分の中で子どもとの関わりは優先順位が非常に高い」、「夫との関わりは優先順位が非常に高い」などの項目と関連を示していた。すなわち母親自身の家庭役割への評価は、実際の行動よりも自身の心理的重要度がより関係していると考えられる。